

第2期中期目標期間
(平成22～27年度)
自己点検・評価報告書

平成28年3月
社会連携本部

目 次

- I 中期目標期間の実績概要
- II 特記事項
- III 次期中期目標期間に向けた課題等
- IV 中期計画の実施状況（主担当分）

I 中期目標期間の実績概要

1. 組織の特徴

(1) 社会連携本部の目的と沿革

社会連携本部は、本学の社会連携活動の推進に関し、①社会連携の推進及び東京工業大学基金の運営に関する事項、②社会連携に関連する各種事業や組織との連携及び調整に関する事項、③学内外の情報収集及び分析に関する事項、④その他社会連携の推進に必要な事項を行うため、平成25年4月1日に、従来の「社会連携センター」及び「創立130周年事業統括本部」を統合して設置された。

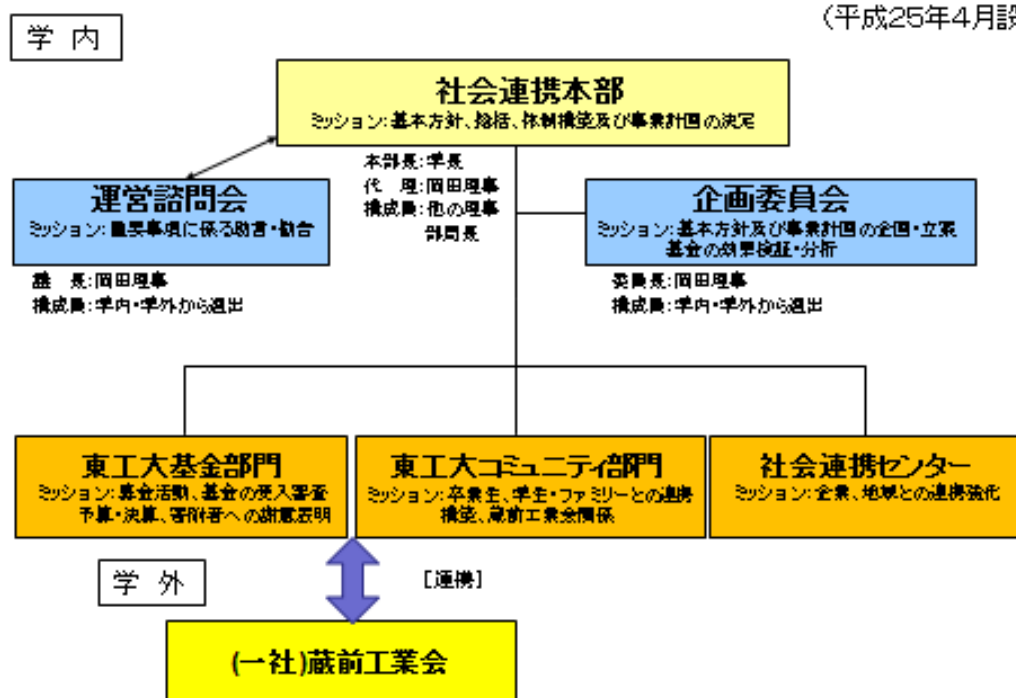
(2) 社会連携本部の体制と業務

社会連携本部は、学長を本部長とし、本部長代理には、社会連携を担当する理事・副学長が就任し、本部員には、各部局長が就任している。

社会連携本部に、「社会連携センター」、「東工大コミュニティ部門」、「東工大基金部門」を置き、「社会連携センター」は、社会連携の円滑な推進に関する業務、「東工大コミュニティ部門」は、卒業生等との連携に関する業務、「東工大基金部門」は、東京工業大学基金にかかる諸活動に関する業務を担当する。

社会連携の推進及び東工大基金の充実を図る運営体制

(平成25年4月設置)



(3) 社会連携改革

平成26年5月に取りまとめられた「東京工業大学 平成の改革 骨子」では、社会連携改革について、教育改革、研究改革やガバナンス改革と共に大学改革の重要な柱として、社会への提言機能、産学連携機能及び広報機能の充実を目標に掲げ改革を進めた。とりわけ、社会への提言機能の充実に

関し、社会・地域・海外から希求されるプロジェクト及びプロジェクト実施組織の柔軟な設置と運営を行った。社会連携センターでは、目黒区及び大田区との連携協定を結び理科教育支援を実施し、また、エジプト日本科学技術大学（E-JUST）の運営を支える主要支援大学としてエジプトの高度人材育成に貢献するなど、社会・地域・海外から希求されるプロジェクトなどを実施し、本学の社会連携改革を推進した。

2. 実績の概要

（1）社会連携センターの活動

社会連携センターは、社会連携の円滑な推進のため、次の活動を実施した。

①小中学生への理科教育の支援

近隣の小中学生への理科教育を支援するため、目黒区及び大田区との間で「連携・協力に関する協定」を締結し、区内の小中学校への出前授業を行うとともに、目黒区教育委員会との連携講座やサイエンスカフェなどを実施した。

②一般向けセミナー等の実施

一般社会人等に対しては、オープンキャンパスなどの全学行事や各種シンポジウム、講演会などを開催し、本学の教育・研究活動を積極的に公開した。一方、社会人への人材育成の観点からは、社会人教育院が提供するプログラムを実施することにより、生涯学習や技術指導などを通して社会貢献に努めた。

③アジア圏での理工学分野における国際貢献

国際的な社会貢献としては、エジプト日本科学技術大学（E-JUST）に対し、本学は、日本式工学教育・研究を導入した E-JUST の運営を支える主要支援大学の一つとして、本学の教員派遣や E-JUST 学生の短期・長期受入を行うことで、エジプトの高度人材育成に貢献した。また、本学とタイの教育機関とのネットワークを構築し、タイの製造業における中核人材を養成するために「TAIST-Tokyo Tech」を設立し3つのプログラムを運営した。

（2）東工大コミュニティ部門の活動

東工大コミュニティ部門は、卒業生等との連携に強化するため、次の活動を実施した。

平成 24 年度から毎年ホームカミングデイを実施し、本学が行っている教育研究を始めとする様々な取組の現状を広く周知したほか、在校生と卒業生との貴重な交流の場として、さらに、地域の方々に本学を理解していただく場として有効に機能することができた。また、卒業生との連携を戦略的に進める上で必須となる名簿管理に関し、他大学の実態を調査し、検討した結果、新たに「東工大オンラインコミュニティ（名簿システム）」の構築を決定し、平成 27 年 6 月より運用を開始した。登録者へは、ホームカミングデイなどのイベント情報や本学の研究最前線の情報などを掲載したメールマガジンを配信した。

(3) 東工大基金部門の活動

東工大基金部門は、東京工業大学基金に関し、次の活動を実施した。

①創立 130 周年募金活動

有識者や同窓生で構成した東工大基金支援会を立ち上げ、平成 20 年度から平成 24 年度に募金活動を行った結果、目標額を上回る約 51 億円の寄附を受けた。

②「東工大サポーターズ会員制度」の創設

本学を継続的に支援いただく寄附制度として平成 26 年度に「東工大サポーターズ会員制度」を創設した。卒業生や企業等に対し、積極的な PR 活動を開始した。

③若手研究者支援「末松基金」の設立

本学元学長である末松安晴先生から平成 26 年度に寄附があった 2,500 万円を基に、平成 27 年 6 月「末松基金」を設立した。若手研究者への支援を行うことで同基金への更なる支援を募ったところ、合計約 6,000 万円の基金となった。

Ⅱ 特記事項

1. 優れた点

(1) 社会連携センター

地域における大学の役割を果たすため、以下のとおり社会貢献に努めた。

- ・大田区及び目黒区との「連携・協力に関する協定」の締結
- ・防災訓練への地元住民の参加
- ・初等理科教育支援
- ・桜花観賞
- ・大岡山さくら祭りへの協力

(2) 東工大コミュニティ部門

新たな名簿システム「東工大オンラインコミュニティ」に、これまで外国人卒業生を対象として運用していた名簿システム「TAMEDAS」を統合することにより、本学の人的資源の包括的な情報管理が可能となった。また、登録者へホームカミングデイなどのイベント情報や本学の研究最前線の情報などを掲載したメールマガジンを配信し、卒業生との連携強化を図っている。平成 28 年 3 月現在、約 7,200 名が登録している。

(3) 東工大基金部門

個人や企業から定期的に定額を支援していただく「東工大サポーターズ会員制度」を平成 26 年度に創設したことにより、安定した寄附金収入が得られるようになり、地域における初等理科教育支援など、継続的な社会貢献が可能となった。また、寄附者に対し謝意を表するとともに東工大基金の用途及び活動報告を行う「感謝の集い」を開催し、寄附者との連携を深めている。

2. 特色ある点

(1) 社会連携センター

本学で実施するイベント情報や研究成果を本学同窓会である蔵前ジャーナルに掲載するなどし、大学運営にかかる情報などを学外へ発信した。

また近隣の目黒区、大田区と連携・協力し連携講座や小中学生向けのサイエンスカフェなどを実施し、小中学生への理科教育支援を継続的に実施している。

(2) 東工大コミュニティ部門

平成 24 年度から毎年開催しているホームカミングデイは、その在り方を考えるタスクフォースで検討を重ね、これまでの同窓力強化に加え、平成 27 年度からは、教職員及び学生が全学一体となって卒業生と交流、及び、社会と連携を図るためのイベントを目指すこととなり、小中学生、高校生、保護者、本学学生の家族、地域の方々を対象とした講演会や研究室公開などのイベントを設け、広く情報発信をすることで社会との連携を深めている。

(3) 東工大基金部門

多様な寄附者からのニーズに対応するため、東工大基金の寄附メニューの充実を図った。特に平成27年度に導入を決定した古本募金は、現金以外ではなく読み終えた本で寄附を募る新しいスタイルの募金方法であり、特に若い年代への寄附文化の醸成に資すると考えている。

また、新入生保護者向けにカレンダーキャンペーンを導入し、新たな寄附者層からの寄附獲得に繋げた。

Ⅲ 次期中期目標期間に向けた課題等

(1) 社会連携センター

地域住民に対して、東工大の活動についてさらに理解を得るような取組みを検討する。
理科教育支援について、異なる形態での支援について試行する。

(2) 東工大コミュニティ部門

「東工大オンラインコミュニティ（名簿システム）」については、提供するサービスを向上させ、魅力あるシステムとすることで、登録者の増加を図る必要がある。

ホームカミングデイについては、同窓生との連携強化と社会との連携強化を両立させ、企画内容を工夫し、毎年、一定（1,500名）以上の来場者を確保する必要がある。

(3) 東工大基金部門

130周年記念事業終了後の寄附金受入状況は、やや横ばい状態であり、いわゆる周年事業の燃え尽き症候群の様相を呈している。今後、新たな募金戦略を策定し、130周年事業において培った卒業生や社会とのネットワークを進化させつつ、募金活動を強化していく必要がある。

《第1期中期目標期間において抽出した課題の改善状況》

(1) 学内情報の把握と適切な学内外との社会連携

- ・学内の出来事を外部へ発信することは、適切なタイミングで正確な情報発信が必要となるが、このために日頃から学内情報を幅広く把握しておく必要がある。この学内情報には、社会連携活動であるものも当然含まれ、本学の社会連携活動の実態全体を明らかにし、場合によっては、それぞれに実施されている社会連携活動を支援する方策に関して検討を行うこととする。
- ・現在、様々な地域貢献活動が、それぞれの部局、専攻、事務担当で行われており、このような自律的な活動が積極的に行われていることは、評価できるものと考えている。

一方、大学全体としての社会連携活動を戦略的に展開しようとする場合には、それぞれに行われている活動を尊重しうまく活動してもらうような方策を提供することも必要と考える。

- ・増大する小中学校からの連携の要望に比して、スタッフの数が充分とは言えず、充分に要望に応えられない状況であることから、教員の活躍を、社会貢献へ結び付けることができるような効果的な体制を構築し、不断の見直しをしていく必要がある。

(改善状況)

- ・学内のイベント調査の際に、それぞれの部局等で実施した社会貢献活動も報告いただくよう調査を行っている。
- ・目黒区と連携・協力に関する基本協定書を締結した。
- ・近隣地域への社会貢献を目的として、目黒区、大田区と連携して、以下の取組を行った。
 - 理科教育支援活動
 - 大田区民大学（東工大提携講座）
- ・本学で実施されるイベント等は、本学ホームページでも積極的に発信しており、様々な社会連携

活動について全学的に把握できるようになっている。また、目黒区、大田区から依頼がある小中学校への理科教育については、協力できるものを選択の上実施してきており、教員単位で協力してもらうケースから、専攻単位で協力を検討するケースなども出てきており、より組織的になってきている。

(2) 130 年記念行事に係る将来を見据えた社会連携

・130 年を機会に、地域社会との連携を強化し、地域社会の一員としての大学の役割を果たすことができるような仕組みを構築する必要があると考える。

(改善状況)

- ・平成 25 年 4 月 1 日に、従来の「社会連携センター」及び「創立 130 周年事業統括本部」を統合して社会連携本部を設置し、地域社会との連携を強化し、地域社会の一員としての大学の役割を果たすための仕組みを構築した。

IV 中期計画の実施状況（主担当分）

中期計画【33】「初等中等教育に対する理科教育への支援及び社会人教育院等において、生涯学習や技術指導の機会を提供する。また、国際的にも科学技術で社会貢献を行う。」に係る状況

社会連携に係る基本方針・戦略の策定と総合的な連絡調整を行う組織として、25年4月1日に、社会連携センター及び創立130周年事業統括本部を統合した社会連携本部を設置し、これまで以上に地域社会との連携を強化し、大学の役割を果たすこととした。

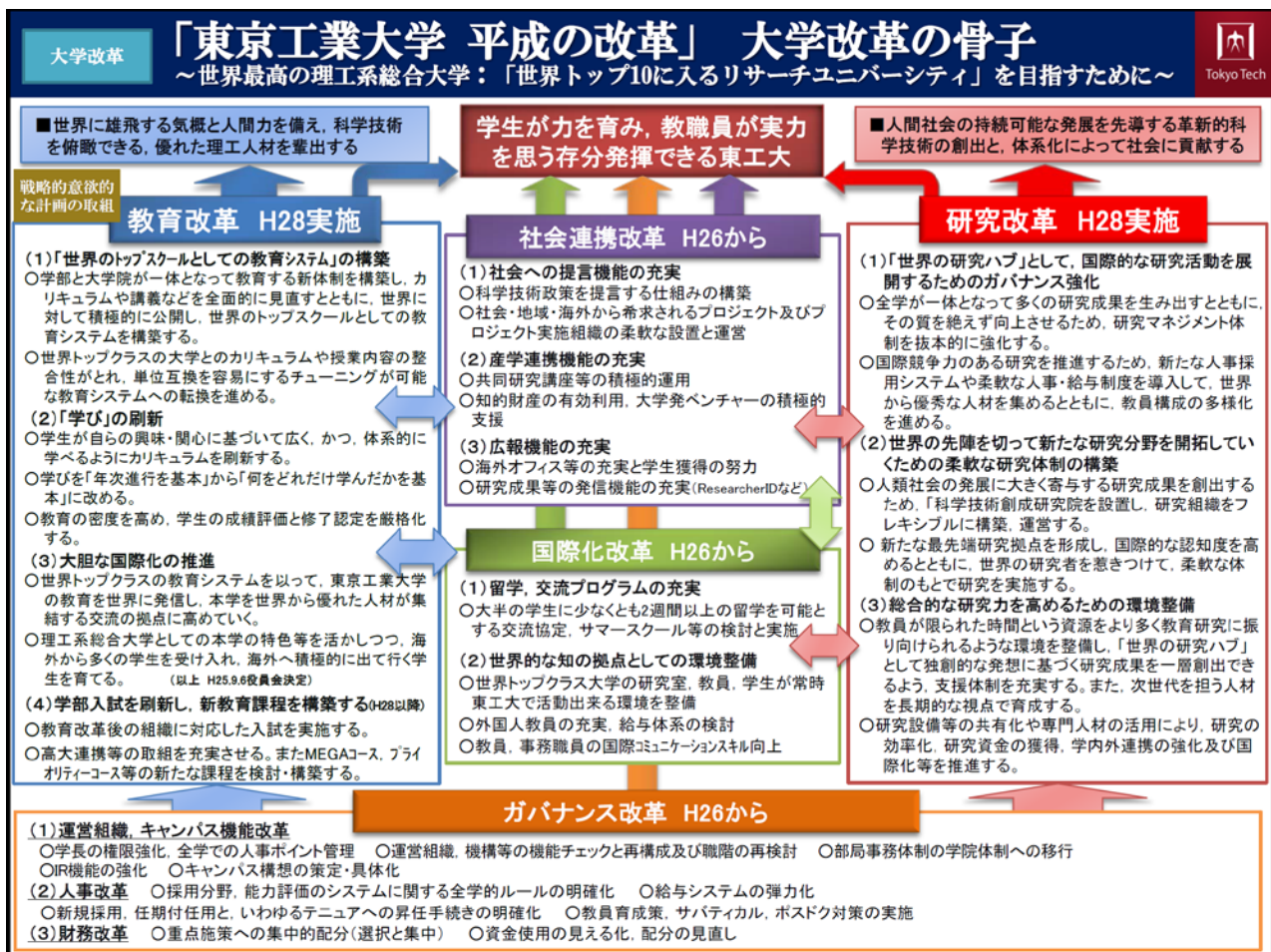
さらに、26年5月に「東京工業大学 平成の改革 骨子」を取りまとめ、社会連携改革について、教育改革、研究改革やガバナンス改革と共に大学改革の重要な柱として、社会への提言機能、産学連携機能及び広報機能の充実を目標に掲げ改革を進めた（資料1）。とりわけ、社会への提言機能の充実に関し、社会・地域・海外から希求されるプロジェクト及びプロジェクト実施組織の柔軟な設置と運営を行った。

初等中等教育に対する理科教育への支援としては、地域社会との連携を強化するため、近隣の目黒区、大田区と連携・協力に関する協定書を締結し（資料2、3）、目黒区、大田区の小学校への出前授業、博物館と目黒区教育委員会との連携講座（資料4）、小中学生向けのサイエンスカフェ等（資料5、6）を実施するなど継続的な支援活動を行った。また、本学の研究成果や活動を広く社会に周知するため、前述2区以外でも、小中学校への出前授業、生命理工学研究科等による高校生のための講習会や公開講座等（資料7、8）及び東工大基金事業による松本工業高校等への出張講義（資料7）などを行った。さらに、オープンキャンパスを開催し、本学の教育内容や研究室を積極的に公開した（資料9）。

本学が誇る最先端の科学技術の紹介や、社会人のキャリアアップ、産業のグローバル化へ対応できる企業人の養成等を目的に21年に設置された社会人教育院では、社会の第一線で活躍してきた経験豊富な方々に、再度学び直す場を提供することを使命とし、本学の高度な専門性やユニークさを活かした大学院レベル技術系継続教育プログラムにより、生涯学習や技術指導などの機会を提供した（資料10,11）。

国際的な社会貢献としては、エジプト日本科学技術大学（E-JUST）に対し、日本式工学教育・研究を導入したE-JUSTの運営を支える主要支援大学の一つとして、教員派遣やE-JUST学生の短期・長期受入を行うことで、エジプトの高度人材育成に貢献した。特に教員派遣では、E-JUSTの8専攻のうち、産業経営工学、エネルギー資源工学、環境工学の3専攻と、支援大学である4大学の中で最も多く、26年度に延べ27名もの教員を派遣した（資料12）。また、本学とタイの教育機関とのネットワーク構築を推進し、タイの製造業の中核人材となる高度な知識を身に付けた研究技術者・開発担当者を養成するTAIST-Tokyo Techを設立し、これまでに3つのプログラムを継続運営している（資料13,14）。運営に際しては、運営費の一部及び学生への奨学金として、賛助会員である企業、卒業生や個人からの寄附金を活用した。修了生はタイ国内企業への就職はもとより、日本や欧米の大学への進学など幅広く羽ばたいており、アジア諸国間の更なるネットワークの強化に貢献した。これらの取組は海外オフィスを拠点として行っており、社会連携改革において広報機能の充実を図るにあたり求められる海外オフィス等の充実と学生獲得の努力に結びつくものである。

(資料1)「東京工業大学 平成の改革 骨子」



出典：本学作成資料

(資料2) 国立大学法人東京工業大学と目黒区との連携・協力に関する基本協定書

国立大学法人東京工業大学と目黒区との連携・協力に関する基本協定書

知の共同体である国立大学法人東京工業大学（以下「大学」という。）と区民の暮らしの安全と安心を支える目黒区（以下「区」という。）は、これまで醸成してきた連携・協力関係をさらに発展させ、それぞれの社会的な役割を尊重し、双方向の連携をもって、これまで為し得なかった新たな価値や可能性を生み出し、明るく希望に満ちた地域社会を築くため、ここに基本協定（以下「本協定」という。）を締結する。

（目的）

第1条 本協定は、教育、研究、産業振興、国際交流等の各分野等において、大学と区の両者がそれぞれの特性を活かして連携・協力することで、自然と調和し互いに支え合うまちの形成と、次代を担う創造性豊かな人材を育成することを目的とする。

（連携・協力事項）

第2条 大学と区は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事項について連携・協力する。

- (1) 理科教育をはじめとする教育に関する事項
- (2) 産業振興に関する事項
- (3) 国際交流等に関する事項
- (4) 街づくりの推進に関する事項
- (5) 大規模災害発生時における連携協力に関する事項
- (6) その他大学と区が必要と認める事項

（個別協定等）

第3条 前条の連携・協力事項を実施するため、必要に応じ本協定に基づく個別協定等を締結することができるものとする。

（協力方法等）

第4条 第2条に掲げる連携・協力事項の具体的実施に当たっては、大学と区の担当部署との協議の上、協力方法、成果の利用及び費用負担等について定めるものとする。

（協定書の有効期間）

第5条 本協定の有効期間は、協定締結日から5年間とする。ただし、大学と区が必要と認めるときは、協議により、その期間を更新できるものとする。

（その他）

第6条 本協定に定めのない事項又は疑義が生じたときは、その都度、大学と区との間で協議するものとする。

本協定の締結を証するため、本協定書2通を作成し、各々1通を保管する。

平成26年3月5日

国立大学法人
東京工業大学長
三島 良直

三島良直



目黒区長

青木 英二

青木英二



出典：広報・社会連携課保管資料

(資料3) 国立大学法人東京工業大学と大田区との連携・協力に関する基本協定書

大田区と国立大学法人東京工業大学との連携・協力に関する基本協定書

区民の生活・文化を支える大田区（以下「区」という。）と知の共同体である国立大学法人東京工業大学（以下「大学」という。）は、これまでに培ってきた近隣の友誼を一層深め、相互に啓発・協力し合いつつ新しい事業を積極的に展開し、もってそれぞれに課された社会的使命を全うして、よりよき未来社会を招来するため、ここに基本協定（以下「本協定」という。）を締結する。

（目的）

第1条 本協定は、教育、産業、文化・国際交流等の各分野等において、区と大学の両者がそれぞれの特性を活かして連携・協力することで、地域産業の振興と地域文化の興隆に貢献し、かつ、次代を担う創造性豊かな人材を育成することを目的とする。

（連携・協力事項）

第2条 区と大学は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事項について連携・協力する。

- (1) 理科教育をはじめとする教育に関する事項
- (2) 文化・国際交流に関する事項
- (3) 情報化の推進に関する事項
- (4) 産業振興に関する事項
- (5) 大規模災害発生時における連携協力に関する事項
- (6) その他区と大学が必要と認める事項

（個別協定等）

第3条 前条の連携・協力事項を実施するため、必要に応じ本協定に基づく個別協定等を締結することができるものとする。

（協力方法等）

第4条 第2条に掲げる連携・協力事項の具体的実施に当たっては、区と大学の担当部署との協議の上、協力方法、成果の利用及び費用負担等について定めるものとする。

（協定書の有効期間）

第5条 本協定の有効期間は、協定締結日から5年間とする。ただし、区と大学が必要と認めるときは、協議により、その期間を更新することができるものとする。

（その他）

第6条 本協定に定めのない事項又は疑義が生じたときは、その都度、区と大学との間で協議するものとする。

本協定の締結を証するため、本協定書2通を作成し、各々1通を保管する。

平成24年4月18日

大田区 長

松原忠義



国立大学法人
東京工業大学 長

伊賀健一



出典：広報・社会連携課保管資料

(資料4) 近隣地域における理科教育支援活動

◆近隣地域における理科教育支援活動一覧表

概 要

東京工業大学は隣接する目黒区、大田区と連携して理科教育支援活動を行っている。主に小中学生を対象としたイベントへの参画、現職の理科教員を対象とした研修を積極的に行っている。

実 績

1) 目黒区

年度	開催日	名称	概要
H22	H22. 6.13	「ふえすた環境 in 目黒 2010」	・原子炉研の有富研究室が参加。「水の不思議」と題して、水の流れを高い周波数をもつ超音波を利用して可視化を行うデモンストレーションや水浄化の仕組みを炭から作られた凝集沈降剤を使用して絵の具水の浄化体験を実施した。
H23	H23. 6.12	「ふえすた環境 in 目黒 2011」	・環境問題への工学的・化学的見地からの取り組みに参加した子どもたちに紹介することで、科学の面白さ・魅力を知ってもらう。原子炉研の有富研究室が参加。
	H24. 3.24	目黒区連携講座 もっと身近にサイエンス！2012「みんなの未来のエネルギー」	・総論は講義・対談形式、各論は実習・実演形式で私たちの身近な電気について学んだ。
H24	H24. 6.23	目黒区立中根小学校生徒来学	・中根小学校の生徒さん複数名が「地域を知ろう」との班別研究の一環で来学。見学及び構内案内を実施した。
	H24. 7. 6	目黒区立大岡山小学校生徒来学	・大岡山小学校の2年生6名が総合学習の班別研究の一環で来学。見学及び構内案内を実施した。
	H24. 7.11	目黒区内中学校理科教員研修	・区内の中学校に勤務する理科教員から希望者を募り、グリーンヒルズ1号館の見学会、伊原准教授による説明及び質疑応答を行った。
	H24. 3.23	目黒区連携講座 もっと身近にサイエンス！「エネルギー変換って何？太陽電池、燃料電池のしくみとこれからのエネルギーシステム」	・グリーンヒルズ1号館（環境イノベーション棟：EEI棟）で太陽電池・燃料電池に関する講演と施設見学を行います。対象は目黒区内在学の中学生以上。
H25	H25.5.7	目黒区立中根小学校出前授業	・本川達雄教授が5年生を対象に、教科書に掲載されている「生き物は円柱形」をテーマに、さまざまな教材を使って分かりやすく伝えた。
	H25.6月 ～H26.3月	学生による小学校での科学教室	・区内小学校において学生による科学教室を開催した。 6.30 田道小学校 「万華鏡づくり」 7. 3 緑ヶ丘小学校 「コップギターづくり」 3.12 緑ヶ丘小学校 「入浴剤づくり」
	H26.2.7	目黒区立第十一中学校	・1年生3名が職場見学として、国際開発工学専攻江頭研究室を訪問した。
	H26.3.15	目黒区教育委員会・東京工業大学百年記念館共催講座「もっと身近にサイエンス！」	・“バイオを学ぼう”をテーマに、主に中学生を対象とした講座を開催した。

H26	H26.4.18	目黒区連携講座「もっと身近にサイエンス！ バイオを学ぼう！」	目黒区教育委員会と本学生命理工学研究科及び博物館の共催により実施した。小中学生を主な対象としたが、DNA を自らの目で見たという経験は、将来の進路に関係なく貴重な体験となり、理系人材の育成に寄与した。
	H26.12.7	目黒エコ祭り（エコライフめぐろ推進協会）	目黒エコ祭りに、国際開発工学専攻（神田研究室）が出展し、環境問題に触れ合う場を提供した。
	H27.2.6	職場訪問	目黒区立第十一中学校の生徒が本学を訪問し、見学やインタビューを通して職業、社会のルール、マナーなどに対する意識を醸成した。
	H27.3.8	目黒区連携講座「もっと身近にサイエンス！ 超分子化学：ナノサイズのガスを作る」	高校生を対象としたサイエンスカフェを開催し、分子ガスの合成や性質に関する講義や質疑応答、実験に参加することにより理系人材の育成という面でも効果があった。
H27	H27.11.1 H27.11.3 H27.11.7 H27.11.8	Scitech Science School 2015	本件は本学学生によるプロジェクトで、目黒区・大田区の小学生(4～6年生)に4日間同じ子供たちに対して「科学」の楽しさや「ものづくり・科学」を考える機会となるような、探求型科学イベントを実施した。
	H28.2.20	目黒区連携講座「色の世界を体験しよう 視覚と色のサイエンスを学ぶ」	中高校生を対象としたサイエンスカフェを開催し、色彩科学に関する講義や視覚実験を通して色の現象を体験し、理系人材の育成という面でも効果があった

2)大田区

年度	開催日	名称	概要
H22	H22. 4.24 H22. 5.29 H22. 6. 5 H22. 7.27	清水窪小学校での科学教室	・親子で一緒に科学実験を行い、科学に関する共通の体験を得ることを目的として開催。学生が講師を務めた。 ○第1回：「ふくらむ科学」→カルメ焼き・サイダー作り ○第2回：「ドライアイスで遊ぼう!!」→ドライアイス実験・アイスクリーム作り ○第3回：「パスタ橋を作ろう！」→乾麺を用いた橋による強度実験 ○第4回：「花火の科学」→花火実験(鉄粉の燃焼実験・炎色反応)・花火作り
	H22. 5. 8	大森第六中学校でスクールパートナー活動開始	・大森第六中学校で、数学・英語の補習教室のサポート、理科クラブのサポートをする「スクールパートナー」活動を開始した。
	H22. 5.14	石川台中学校でスクールパートナー活動開始	・石川台中学校で、主に理科授業をサポートする「スクールパートナー」活動を開始した。
	H22. 7.29	赤松小学校での科学教室	・親子で一緒に科学実験を行い、科学に関する共通の体験を得ることを目的として開催。学生が講師を務めた。内容はドライアイス実験・アイスクリーム作り。
	H23. 1.29	小学生向けロボット教室「人に役立つロボットを作ろう」	・主催は機械宇宙システム専攻広瀬・福島研究室（後援：学生支援センター）。実際に子どもたちにロボットを操作してもらうことにより、楽しさを体感してもらった。
	H23. 2.20	第11回「エコフェスタワンダーランド」 in 矢口西小学校	・区内の環境問題に取り組む団体・企業が集まり、子ども達が環境について考えるきっかけとなることを目的に毎年開催している。原子炉研の有富研究室が参加。出展コーナーでは、活性炭をベースにした凝集沈降剤による濁水の浄化技術について紹介した。

H23	H23. 7.28	「放射線」をテーマにした教員研修	・放射線についての体系的な理解から具体的な実験方法について学び、放射線に関する最先端の科学技術についての理解、いかに授業に生かせるかという視点での研修を開催。講師は原子炉研の井頭教授。
	H23. 8.19	「東工大生と小中学校教員との協働による実践型サイエンスコミュニケーション～授業で使える理科教材開発～」	・東京工業大学の学生たちが大田区内の小中学校の先生とコラボレーションして新しい教材・授業開発を行った。大学院の授業と学校教員の研修が一緒になった新しい形の学校連携の成果発表、体験会。今日求められている実践型サイエンスコミュニケーションについての講演のほか、学生と教員が協働で作成した指導案の発表も行った。
	H23.11.29 H24. 3.10	清水窪小学校での科学教室	・親子で一緒に科学実験を行い、科学に関する共通の体験を得ることを目的として開催。学生が講師を務めた。 ○第1回：「お豆腐をつくろう！」→豆乳、塩析の説明 ○第2回：「ガラス細工」→マドラー制作
	H23. 2.19	第11回「エコフェスタ・ワンダーランド」 in 小池小学校	・区内の環境問題に取り組む団体・企業が集まり、子ども達が環境について考えるきっかけとなることを目的に毎年開催している。原子炉研の有富研究室が参加。出展コーナーでは、水性絵の具を溶かした水を汚水に見立て、凝集沈降剤で水を浄化する実験を行う「水博士認定コーナー」を運営した。
	H24. 3. 3	「東工大・おおたサイエンスフェスタ」	・本学大学院学生と小・中学校教員との共同研究による理科教材の作成とプログラム開発を行い、教員の理科指導力の向上に役立てた。 【対象：大田区小学生中学年～高学年 160名】
H24	H24. 6.21	「おおたサイエンススクール」	・2007年以降、JSTからの補助金を元に大田区が展開している事業。研究校である清水窪小学校で、本学教員が「おもしろ理科教室」の一環で5年生に顕微鏡の使い方を指導した。
	H24. 8.17	「未来の理科実験大集合 ー授業で使える教材開発発表会	・東京工業大学の学生たちが大田区内の小中学校の先生とコラボレーションして、学校で活用できる面白い授業の指導案及び実験を行った。
	H25. 2.24	第12回「エコフェスタ・ワンダーランド」 in 池上小学校	・区内の環境問題に取り組む団体・企業が集まり、子ども達が環境について考えるきっかけとなることを目的に毎年開催している。原子炉研の有富研究室が参加。
H25	H25.8月～11月	学生による小学校での科学教室	・区内小学校において学生による科学教室を開催した。 8. 8 小池小学校 「コップギターづくり」 8.26 清水窪小学校 「入浴剤づくり」 8.31 馬込第三小学校 「サイエンスショー」 11.16 矢口西小学校 「紙飛行機づくり」 11.30 清水窪小学校 「エコカイロの制作」
	H25.11.27	清水窪小学校	・化学専攻伊原准教授の研究室に4年生40名を迎え、環境エネルギーイノベーション棟の見学と研究内容の紹介を行った。
	H26.1.23	「おおたサイエンススクール」 (清水窪小学校)	・大田区が展開している同事業に本学教員が、継続的に連携してきたほか、この日の中間発表において、鈴木正昭教授が本学と清水窪小学校との連携について講演を行った。
H26	H26.8.15	東工大・おおたサイエンスフェスタ	大田区教育委員会と本学の応用化学専攻等の協力により、大田区内の小学生を対象にした科学教室を開催し、科学への糸口を示した。

	H26.11.15	エコフェスタ・ワンダーランド「水の不思議」(東調布第三小学校, 中学生など)	大田区東調布第三小学校において, 身近な「水」をテーマにその科学的性質を実感するため様々な実験を通して科学の魅力を体感させた。
	H26.12.10	大学でおもちゃを作って学ぼう (清水窪小学校)	本学, 機械系専攻が清水窪小学校の生徒を対象に, トコトコ動くおもちゃを自分で作って遊びながら, 物理現象を学ぶ機会を提供した。
	H26.12.26	作って, 遊んで, 学ぶ工場 (本学ものづくりセンター)	本学, 機械系専攻が清水窪小学校の生徒を対象に, トコトコ動くおもちゃを自分で作って遊びながら, 物理現象を学ぶ機会を提供した。
	H27.3.27	作って, 遊んで, 学ぶ工場 (本学ものづくりセンター)	本学, 機械系専攻が清水窪小学校の生徒を対象に, トコトコ動くおもちゃを自分で作って遊びながら, 物理現象を学ぶ機会を提供した。
H27	H27.7.31	2015 東工大・おおたサイエンスフェスタ	大田区教育委員会と本学の応用化学専攻等の協力により, 大田区内の小学生を対象にした科学教室を開催し, 科学への糸口を示した。
	H27.8.28	地球とあそぼう 2015	地域の小学生を対象とした, 化石・鉱物などを使った体験実習を実施した。
	H28.10~3	科学教室	小・中・高校生を対象にした科学教室を実施した。 10.10「生命現象ー物理と化学からのアプローチー」 10.11「海辺に棲む生物の観察ーウニやヒトデはどうやって生きているのー」 11.14「植物のミクロな動きを顕微鏡で観察しよう」 3.29「棘皮動物の不思議な世界」
	H28.1.20	大田区立大森第6中学校	同校生徒が本学を訪れ, 授業の一環として企画した「景観まちづくり学習」に本学博物館が対応することとなり, 道家特命教授がインタビューを受けるとともに学内諸施設を案内した。
	H28.1.30	研究所訪問(地球生命研究所)	清水窪小学校6年生20名, 教師3名に対して「地球の内部」についての説明や, 「ダイヤモンドアンビルセル」を使った実験, 顕微鏡での観察など実演等を交えて説明した。

出典：広報・社会連携課作成資料

(資料5) サイエンスカフェ 2014「腸内細菌ってなんだ？」(目黒区との連携講座)

2/3 ページ



ちょうないさいきん
腸内細菌って
なんだ？
3月27日(金) 13:30~15:30

腸内細菌(ちょうないさいきん)という言葉聞いた事がありますか？私たち人間の腸には約 1000 種類 100 兆個の細菌が住み着いています。人によってどの細菌がどの程度住み着いているかは違います。太っているヒトや瘦せているヒト、病気の人それぞれに特徴ある細菌が住んでいます。

腸内細菌たちは、私たちが毎日食べているものを腸内で食べ、細菌の間で生存競争をしています。皆さんのお腹の中でこの菌たちが24時間365日激しい戦いを繰り返しているのです！

今回のサイエンスカフェの舞台はみなさんの腸内です。生命理工学研究科山田拓司先生が腸内細菌の仕組みをお教えします。さあ金曜の午後、ボードゲームで楽しく遊びながら腸内細菌叢について学んでみませんか？

会場：東京工業大学 附属図書館 2階学習棟

対象：どなたでも(小学新5年生~中学新3年生向け 保護者同伴可)

定員：40名(抽選/参加費無料)

申込：電子メールまたはFAXにて東京工業大学博物館事務室に申し込み下さい

E-mail: centcafe@jim.titech.ac.jp FAX: 03-5734-3348

申込時に、名前・年齢・性別・連絡先(E-mail, 電話番号など)・職業(学校名と学年)を明記して下さい。

申し込み締めきり：3月18日(水)

主催：東京工業大学 生命理工学研究科山田研究室, 博物館, 図書館, 基金室 / 写真：ボードゲーム「バクテロイコ」



このイベントは東工大基金によりサポートされています。
東工大への寄附 > 東京工業大学基金

お問い合わせ先
東京工業大学博物館・百年記念館
Tel: 03-5734-3340
Email: centcafe@jim.titech.ac.jp

更新日：2015.02.12

Copyright © 2015 Tokyo Institute of Technology. All rights reserved.

出典：本学ホームページ
<http://www.titech.ac.jp/event/2015/029883.html>

(資料6)「もっと身近にサイエンス！」(目黒区との連携講座)

東京工業大学
Tokyo Institute of Technology

[トップページ](#) > [東工大ニュース](#) > 「もっと身近にサイエンス！」 超分子化学:ナノサイズのカプセルを作る」開催報告

「もっと身近にサイエンス！」 超分子化学: ナノサイズのカプセルを作る」開催報告

[社会連携](#) [開催報告](#)

いいね! 42
 ツイート

RSS

2015.03.17

3月8日、東工大蔵前会館のロイヤルブルーホールで、サイエンスカフェ「もっと身近にサイエンス！」 超分子化学:ナノサイズのカプセルを作る」を開催しました(開催責任者:吉沢道人 准教授)。今回は、本学博物館と目黒区教育委員会の連携講座として、高校生対象に参加者を募集したところ、予想に反して小学生から大人(80代)まで幅広い年齢の方々から申込みがあり、約30人が参加しました。

資源化学研究所 穂田・吉沢研究室は、約2年半前に同様の企画を、本学博物館と共同で開催していますが、今回はその経験を活かした拡大版(2倍)として、講義と実験と“カフェ”を含めて3時間の内容を準備しました。ポイントのひとつ目は、身の回りのサイエンスから大学の研究成果までを理解してもらい、研究室で初めて作った化合物の合成や初めて見つけた現象を参加者の手で再現してもらうことです。もうひとつは、日々研究と格闘している学生に指導してもらい、実際の研究を参加者に直接伝えることです。今回は、穂田・吉沢研究室メンバーの近藤 圭さん(博士課程3年)が中心となり、11名の大学院生が2人1組となって実験指導を行いました。

前半の講義(60分)では、吉沢准教授が「新しい分子フラスコの開発を目指して」と題して、身近にある“分子”のフラスコの例を紹介した後、研究室の最近の研究成果として、新しい分子フラスコの設計や合成を説明しました。講義中の急な質問(「なぜ、ガラスのフラスコを使うの?」など)にも参加者は積極的に答えてくれました。また、分子フラスコの性質について、現在進行中の研究成果も含めて紹介しました。講義後の質問時間では、「新しい分子フラスコに可愛いネーミングを!」というアドバイスもありました。専門的な内容を多く含みましたが、終了後のアンケートでは、参加者の7割が講義を“良く理解できた”または“理解できた”と答えていました。



分子模型を使った講義



大学院生の指導による化学実験

講義後は6つの班に分かれて、各机で参加者と学生が飲食をしながら科学について気軽に語り合い(カフェ:20分)をした後、後半の実験(110分)をスタートしました。まず、分子模型を組み立て、実験に使う分子の立体構造を理解してもらいました。その後、大学院生に1つ1つの操作や原理を教わりながら、参加者は水中で組み上がる“柔軟な”分子カプセルの合成や、そのカプセル内への様々な大きさや形の分子の取り込み実験を行いました。そして、このカプセル特有の溶液色や蛍光色の变化などを観察してもらいました。沢山の疑問や質問に大学院生が丁寧に答えつつ、用意していた

12個の全実験を完了することが出来ました。実験についてのアンケートでは、約9割の参加者が“理解できた”以上でした。

出典：本学ホームページ

<http://www.titech.ac.jp/news/2015/030171.html>

(資料 7) 高校生のための夏休み特別講習会 (生命理工学部) (抜粋)



東京工業大学
生命理工学部・大学院 生命理工学研究科
School and Graduate School of Bioscience and Biotechnology
Tokyo Institute of Technology

[TOP](#)
[イベント](#)
[高校生のための夏休み特別講習会](#)

高校生のための夏休み特別講習会

東京工業大学・生命理工学部では、高校生に実験を通して現代の科学技術の柱の一つとなる生命理工学の最前線を体験してもらい、この分野の面白さを発見してもらうことを目的として開催しています。

お知らせ

「第23回高校生のための夏休み特別講習会」の記録写真掲載 **NEW**

2015年度「第23回高校生のための夏休み特別講習会」(2015年7月23日(木)～7月24日(金))の記録写真を掲載しました。

[2015年度「第23回高校生のための夏休み特別講習会」写真ページへ](#)
[応募方法・講習会テーマなど詳細ページへ](#)

※ 過去の開催報告は、下記の「高校生のための夏休み特別講習会 一覧」をご覧ください。

高校生のための夏休み特別講習会 一覧
「生命理工学への招待」～バイオの世界を探検してみよう～

第23回 2015年度

「発酵食品微生物の遺伝情報解析」 平沢 敬
「生体システムの不思議を体感する生体システムの不思議を体感する」 相澤 康則

[開催概要へ](#)
[講習会記録写真へ](#)

第22回 2014年度

「がんを光らせる仕組みを学んでみよう！」 近藤 科江
「顕微鏡で観る細胞ワールド」 十川 久美子

[開催概要へ](#)
[講習会記録写真へ](#)

第21回 2013年度

「卵の中をのぞいてみよう！」 田中 幹子
「バクテリアの遺伝子を操作してみよう！」 小倉 俊一郎

[開催概要へ](#)
[講習会記録写真へ](#)

出典：本学ホームページ

<http://www.bio.titech.ac.jp/event/highschool/>

(資料8) 出張授業「工業高校との高大連携ものづくり人材育成プロジェクト」

平成27年4月13日

**「日本再生：科学と技術で未来を創造する」プロジェクト
実績報告書**

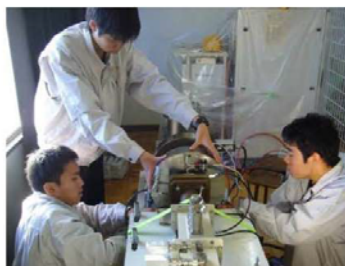
研究代表者名 所属部局・専攻・役職	原子炉工学研究所・准教授 林崎 規託			
事業名称	工業高校との高大連携ものづくり人材育成プロジェクト			
配分決定額	450千円			
	合計	物件費	旅費	その他
実支出額の使用内訳	円 450,000	円 0	円 450,000	円 0
申請書の使用内訳	円 450,000	円 0	円 450,000	円 0
活動内容				
文部科学省の高等学校学習指導要領では、工業科の科目として「課題研究」が定められており、習得した知識・技術の深化を図る学習を通じて、問題解決の能力や自発的、創造的な学習態度を育てることが狙いとされている。工業高校は、我が国の「ものづくり人材」の育成を担う教育機関のひとつであるが、工業高校生が先端科学技術について実際に触れて学ぶ機会は少ない。本事業では昨年度に引き続き、ものづくり人材の裾野拡大に向けて、粒子加速器に関する「課題研究」をテーマに、本学と工業高校との有機的な高大連携のあり方を探った。 【活動時期】 平成26年8月～平成27年3月 【活動場所】 長野県松本工業高校：ECR（電子サイクロトロン共鳴）プラズマ発生装置の開発 長野県駒ヶ根工業高校：高大連携講演会 原子炉工学研究所：出前授業や実習授業の準備 【参加人数】 長野県松本工業高校電気科：教員1名、高校生4名 長野県駒ヶ根工業高校電気科：教員9名、高校生75名 東京工業大学：教員1名、大学院生5名 産業技術総合研究所：研究員3名 【活動内容】 長野県松本工業高校において、大学院生が粒子加速器の原理と自らの研究に関する出張授業をおこなった。そして、高校生自らが、米国ロスアラモス国立研究所が配付している2次元磁場解析ソフトウェアを用いてプラズマ閉じ込め磁場コイルを設計製作し、本学より無償貸与された実験装置に組み込んで ECR プラズマの発生に成功した。研究終了後に高校生はレポートをまとめ、その内容が評価され、第2回全国高大連携発表会・マッチングフォーラムにおいて研究成果の発表をおこなった。また、これまで高大連携を進めてきた長野県駒ヶ根工業高校においては、本学教員と産業技術総合研究所の研究員が取り組んでいる先端科学研究を紹介する高大連携講演会を開催し、同校教員および高校生から好評を得た。				

成果

【本事業の成果】



大学院生による出前授業



高校生自らが磁場コイルを設計製作



発生に成功した ECR プラズマ



第2回全国高大連携発表会で発表

本事業の取り組みは、参加した高校生の評判もよく、目標としていた実験にも無事成功した。また、新聞報道などにより活動が周知され、教育関係者や地元企業からも高い評価が得られた。本活動のスピノフ行事である全国ものづくり高大連携発表会・マッチングフォーラムも、前年に引き続き第2回が長野県駒ヶ根市の主催により駒ヶ根市文化会館において開催された。

【参加した高校生の感想文】

二次元磁場解析ソフトを使って磁場のシミュレーションをしていたが、最初はソフトを使いこなすことが大変でしたが様々なパターンを試していると次第に慣れることができました。最初は目指している磁場強度よりもとても低く、コイル間の距離を近づけすぎるとプラズマが発生するための谷ができなくて山が一つになってしまったりして、本当にこれでプラズマが発生するのかなと思いましたが、コイルの距離や巻数を調整していくと目指している数値に近づいてきたので良かったです。

自分は電磁波について調べましたが、電磁波は周波数によって様々な特徴があり、発生原理など自分が知らないことがたくさん分かり理解を深めることができたので良かったです。自分が調べたことを他の人に分かりやすくまとめることはとても大変だと分かりました。東工大の方に質問されたときにあまりうまく答えることができなかったのも、さらに理解を深めて答えられるようにしたいです。

実際に自分たちが設計したコイルや、石英管を組み立てて調整していくとコイルの高さなど様々な調整をするのがとても大変でした。真空実験では一回目で自分たちの目指している高真空まで引くことができて良かったです。東工大の方と一緒にプラズマ生成実験を行い、プラズマの生成に成功できてとても良かったです。

【新聞報道など】

- ・信濃毎日新聞「松本平タウン情報」：平成27年2月3日
- ・長野日報：平成27年2月7日朝刊

(資料9) オープンキャンパス 2015



東京工業大学
 Tokyo Institute of Technology

いいね! 33
 ツイート
 RSS

トップページ > 東工大ニュース > オープンキャンパス2015 開催報告

オープンキャンパス2015 開催報告

2015.11.25

8月8日、東京工業大学オープンキャンパス2015を開催しました。本学のオープンキャンパスは、秋の工大祭と同時に行われていましたが、昨年度から夏に単独の日程を設けて実施しています。当日は、長く続いていた猛暑が少しだけ収まり、曇り空に時折眩しい晴れ間がのぞきました。最終的に約15,000名の来場者を迎え、大盛況となりました。

教育
開催報告



総合案内所

オープンキャンパスの最も重要な趣旨は、東工大を目指す高校生・受験生に、教育・研究を実際に紹介し、東工大の特徴を体験的に理解してもらうことです。これを達成するために、第1類から第7類までの教員ならびに学生の積極的な協力を得て準備を進めるとともに、本年度は「2016年4月、東工大が変わる」と銘打ち、本学が現在取り組んでいる教育改革の詳細を重点的に伝えることを目指しました。以下では、その企画の一部を紹介します。



西地区案内所

◆ オープンキャンパス入場者数	平成 22 年度	約 2,000 名
	平成 23 年度	約 2,000 名
	平成 24 年度	約 2,000 名
	平成 25 年度	約 2,000 名
	平成 26 年度	約 12,000 名
	平成 27 年度	約 15,000 名

出典：本学ホームページ及び入試課作成資料
<http://www.titech.ac.jp/news/2015/032784.html>

(資料 10) 東京工業大学社会人教育講座・プログラム



東京工業大学 社会人教育院
 Tokyo Institute of Technology

サイト内検索

[東工大トップへ](#)
[お問い合わせ](#)
[交通アクセス](#)

[トップ](#)
[学長・院長あいさつ](#)
[講座・プログラム](#)
[講演会](#)
[緊急時対応](#)
[リンク](#)

[トップ](#) > [製造中核人材育成講座](#) > [金属熱処理スーパーマイスタープログラム](#)

講座・プログラム

総合案内

[グローバル産業リーダー育成プログラム \(GINDLE\)](#)

[理工系一般プログラム](#)

[キャリアアップMOTプログラム](#)

[製造中核人材育成講座](#)

[金属熱処理スーパーマイスタープログラム](#)

金属熱処理スーパーマイスタープログラム

東京工業大学 社会人教育院では、社会貢献の一環として、「手づくり教育・人材育成の伝統」の下、ものづくりを支える現場の高度技能とボーダーレスな先端技術を統合して、新技術・新製品を開発できる人材、すなわち製造中核人材(スーパーマイスター)を育成する社会人向け講座を設置しております。

本講座は、企業において、概ね10年以上の実務経験を有し、企業の次世代を担う30～40歳の現場技術者に「ものの見方・考え方」、「知識」、「人脈」の幅を広げていただくことを念頭に開発されました。

平成26年度につきましては、製造中核人材育成講座「金属熱処理スーパーマイスタープログラム」を開講する運びとなり、受講生を募集中です。企業経営者の皆様にご満足いただける内容と確信しておりますので、企業の将来を担う中核技術者の派遣をお待ちしております。

詳細につきましては、[パンフレット](#)および[募集要項](#) (PDF)をご覧ください。

※定員に達したため、**〆切**しました(4月16日)

<実施要領>

実施期間	平成26年4月～平成27年8月の土曜日
受講対象	金属熱処理業等において、概ね10年以上の実務経験を有し、企業の次世代を担う30～40歳の現場技術者(企業派遣を原則とします。)
受講料	540,000円(税込) ※1
募集人員	20名
実施場所	東京工業大学 大岡山キャンパス 東京都目黒区大岡山2-12-1 (インターンシップは別途)
募集期間	平成26年2月25日(火)～4月23日(水) ※ 募集締切日を延長しました。 (平成26年4月4日更新) ※ 定員になり次第締め切らせていただくことがあります。
申込方法	Webサイトより、受講申込書をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記、問合せ先まで 郵送 にてお申込み下さい。 【応募書類】 受講申込書： ダウンロード (Word)

※1：本講座の受講料は、所定の要件を満たした場合、次の税額控除あるいは助成金の対象となる場合があります。詳細は厚生労働省のホームページでご確認下さい。
・「キャリア形成助成金(訓練等支援給付金)」
(<http://www.mhlw.go.jp/general/seido/isei/kyufukin/d01-1.html>)

< 問合せ先 >
 東京工業大学 社会人教育院事務室
 〒108-0023 東京都港区芝浦3-3-6
 キャンパス・イノベーションセンター 809号室
 TEL: 03-3454-8867 FAX: 03-3454-8762
 E-mail: jim@kyoiku-in.titech.ac.jp

出典：本学ホームページ

http://www.kyoiku-in.titech.ac.jp/extension/ex01/detail_153.html

(資料 11) 東京工業大学社会人教育院開講講座・プログラム受講者実績 (H21-27)

社会人教育院 開講講座・プログラム修了者、主催講演会受講者数実績(H21-27)

講座名 \ 年度	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
製造中核人材育成講座	35	31	20	20	20	20	20
キャリアアップMOTプログラム	48	117	112	119	117	140	135
グローバル産業リーダー育成プログラム(GINDLE)					50	21	29
理工系一般プログラム	319	114	96	89	42	51	76
社会人教育院主催講演会	100	658	406	341	開催なし	422	361

※いずれも複数の講座が存在する場合は、合算の上、延べ人数で計算。

出典：社会人教育院作成資料

(資料 12) 東工大の E-JUST 支援

東工大のE-JUST支援

いいね！ 41

ツイート



東京工業大学は、国際貢献にも積極的に取り組んでいます。エジプト日本科学技術大学(E-JUST)は、日本・エジプト両政府の協力のもと、2009年に設立されたエジプト初の国立理工系大学院大学です。東工大は、日本式工学教育・研究を導入したE-JUSTの運営を支える主要支援大学のひとつとして、エジプトの高度人材育成の一翼を担っています。

東工大が果たす役割と貢献

E-JUSTを支援する国内大学12校のうち、東工大を含む4大学が実際に教員の長期派遣や大学運営に係る助言等を行っています。東工大が担当する専攻は、産業経営工学、エネルギー資源工学、環境工学のE-JUST8専攻中3専攻と、4大学の中で最も多く、2014年度には延べ27名もの教員を派遣しています。

また、日本の最先端の研究環境で研究する機会、そして国際感覚を養うことを目的に、各支援大学はE-JUST学生の短期・長期受入も行っています。2014年度の東工大の受入実績は、修士・博士学生13名、教員4名で、今後も継続して受入れを行っていきます。



E-JUSTキャンパス

出典：大学ホームページ

http://www.titech.ac.jp/globalization/stories/ejust_tokyo_tech.html

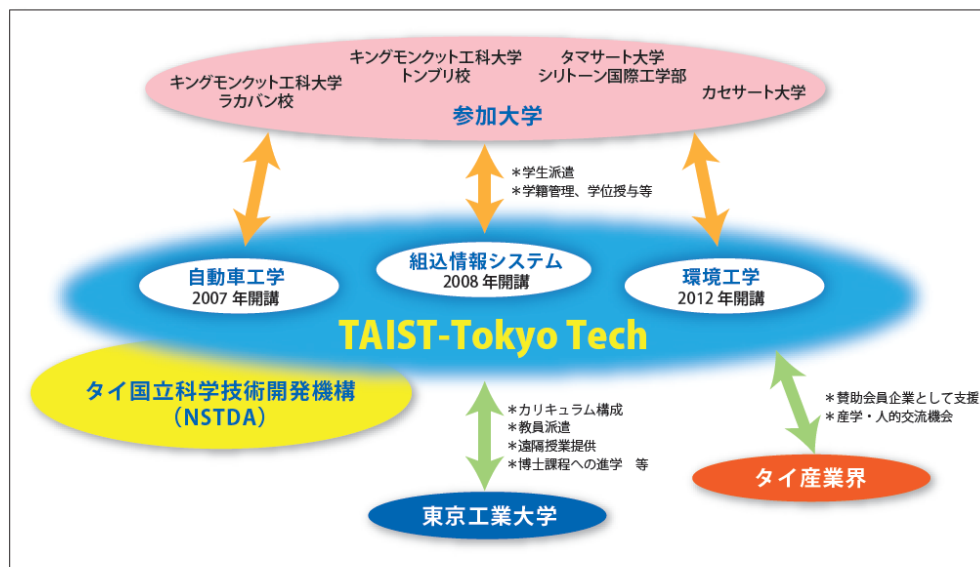
(資料 13) TAIST-Tokyo Tech(東工大がリードする日・タイ人材育成ネットワーク)

東京工業大学「日・タイ人材育成ネットワーク」のご案内

東京工業大学は、創立 130 年を契機に、タイ国教育機関との情報ネットワーク構築・人材交流等を旨とした「日・タイ人材育成ネットワーク」を充実・推進することと致しました。そこで、タイ国科学技術振興及び「タイものづくり人材育成」に関心をもつ企業を対象に、当該ネットワーク参加募集のご案内を致します。

東京工業大学のタイ「ものづくり人材」育成への取り組み

東京工業大学は、2007 年にタイ国立科学技術開発機構 (NSTDA : National Science and Technology Development Agency) 及びタイの各大学と連携し、タイ国製造業で中核となる高度な知識を身に付けた研究技術者・開発担当者養成を目的に、大学院「TAIST-Tokyo Tech (Thailand Advanced Institute of Science and Technology)」を設立しました。現在、「TAIST-Tokyo Tech」には自動車工学・組込情報システム各プログラムに 100 名を超える学生が在籍し、2011 年度までに 40 名を超える修了生とともに、近年、博士課程への進学者も輩出し、タイ産業界からの注目度・期待も非常に高いものがあります。新たに開講した環境工学コースも含めて、タイ国内教育機関との更なる連携充実を図り、タイ国科学技術振興を目指し「ものづくり人材」育成に貢献して参ります。



Kyoto Tech

TAIST-Tokyo Tech とは？

経緯
Background

タイ政府からの要望により、理工系分野での高度人材の育成と研究開発のハブを目指して設立されました。

目的
Mission

タイにおける急速な工業化から派生する問題を解決すべく、先端技術と環境の調和を目指し、地球全体での持続可能な発展を支えるべき研究・人材育成を目的としています。

TAIST-Tokyo Tech
東工大・NSTDA・タイ連携大学院

プログラム
Programs

現在展開している 3 プログラムは、いずれもタイでのニーズを踏まえ、また東工大の強みを活かした分野となっています。(定員：各プログラム 30 名 / 年)

- ・ Automotive Engineering (AE) : 自動車工学 (2007 年 6 月開講)
- ・ Information & Communication Technology for Embedded Systems (ICTES) :
組込情報システム (2008 年 6 月開講)
- ・ Advanced and Sustainable Environmental Engineering (EnvE) : 環境工学 (2012 年 6 月開講)

卒業学生の進路
Career Paths

これまでの卒業生は、日系・タイ企業を含め、様々な民間企業への就職はもちろん、タイの大学や研究所への就職、また東工大を初めとする日本や欧米の大学での博士課程進学と幅広く羽ばたいています。

また、ベトナムからの留学生は本国へ戻り、ベトナムの大学で教員となっています。

こうした卒業生たちから、今後の産学、そして日本とタイ、近隣アジア諸国のネットワークが更に強化されていくことが期待されています。

これまでも親密であった日本とタイとの関係を活かし、またこれからのアジアでのネットワークをより広く・深く築いていくための先駆的取組、

それが **TAIST-Tokyo Tech** です。

出典：本学ホームページ

<http://www.ttot.ipo.titech.ac.jp/docs/Pamphlet0703.pdf>

(資料 14) TAIST プログラム修了者数 (H21-27)

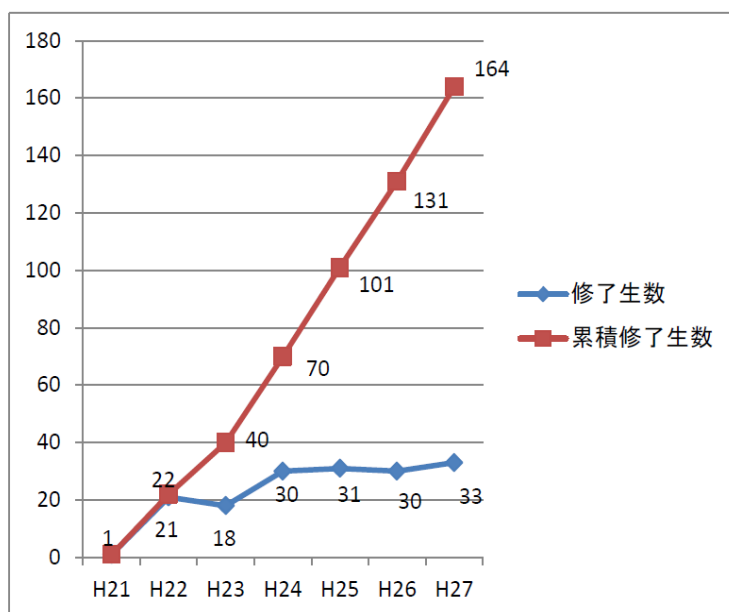
TAISTプログラム修了者数(H21-27)

年度	修了者数			
	AE	ICTES	EnvE	計
H21年	1	0	0	1
H22年	5	16	0	21
H23年	6	12	0	18
H24年	14	16	0	30
H25年	11	20	0	31
H26年	5	13	12	30
H27年	9	10	14	33
合計				164

AE:自動車工学(2007開講)

ICTES:組込情報システム(2008開講)

EnvE:環境工学(2012開講)



年度	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
修了生数	1	21	18	30	31	30	33
累積修了生数	1	22	40	70	101	131	164

出典：国際部国際事業課作成資料